

---

# 連鎖の因縁

夢見魁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

連鎖の因縁

### 【コード】

N9714P

### 【作者名】

夢見魁

### 【あらすじ】

これはまだ序章で、ある兄弟達の物語が始まるのです。

## 序章（前書き）

あまり読んで意味わからなくなるかもしれませんが、精一杯書いたのでよろしくお願いします。

## 序章

昔、ユゼリス国という国があった。

そこは壮大でとても豊かな国だった。

ある時、その国に後継者候補が2人あがった。どちらとも優れており国王は悩んだ。その末、呪い専門の一族に相談したのだ。この一族は昔から王家に仕えており信頼されていた。が、その一族達も2人の噂を耳にしており半分に分かれてしまっていた。

これから少しして一族内で戦が起き、勝った方が推薦していた者が王座を手に入れたという。負けた方が推薦していた者は突然病にかかり死んでしまったらしい。そして今に至る。

「絶対に逃がしてはならぬ！なんと少しでも連れ戻せ！！」と勝った方の大将（こんな喋り方だけど20代）は叫んでいた。部下達は慌てて探した。が、もう近くにはいなかった。

隣の国との国境に位置する雪山の中に寒さをこらえ、道無き道を進む集団があった。先頭に立って歩いている者が後ろを向いて声をかけていた。

「あと、もう少しです。皆頑張つて。」と美しい声を必死に張り上げていているこの人こそ負けた方の大将だった。

このように2つに分かれてしまい、対立しても目には見えない呪いの連鎖が続く事を2人の大将は決して忘れてはいけなかった。

つづく

## 序章（後書き）

読んでくれてありがとうございます？

呪いを受け継ぐ者(前書き)

続きを書くの遅くてごめんなさい( < | > )

## 呪いを受け継ぐ者

「そして、結局勝った方の大将は負けた方の大将を見つけることができませんでしたとさ。」

「それでおしまい？つまらないよ」と目の前の小さな男の子が言ったので、皆様にも続きをお聞かせしましょう。

それから、何年経ったかわかりませんが、負けた方の大将は遠い国の王と結婚していました。

王妃となった彼女はとても幸せそうでした。

ある時、彼女が赤ちゃんを身ごもった事を聞いて国王は喜び、会議そっちのけで駆け付けてきました。が、なぜか彼女は落ち込んでいました。

「どうしたのだ！なぜ、そのように落ち込んでいる？」

と国王が言うと彼女は顔をあげて答えました。

「呪いを専門とする私達の子供はハーフの時に呪われて生まれてくることがあるのです。私はそれが心配なのです。」そんな彼女に国王はこう言いました。

「大丈夫だ、心配することはない。」と。

その言葉で元気がでたのか、彼女は「頑張る」と言いました。

それから数ヶ月後、男の子と女の子の双子の赤ちゃんが産まれました。が、男の子方は、数日後に左目から涙が流れるように血がでてきました。

その時彼女は思いました。

「ああどうして、この子だけ、あなたの仕業なの？兄上……」とね。

でも、彼女は知らないだけで、あの女の子もこれから産まれてく

る子も呪いを受け継いで来るのですよ。



呪いを受け継ぐ者（後書き）

読んでくれてありがとうございます！ ^ ^ (^ ^)

誤字があったら教えて下さい。

バカな兄弟達の絆(前書き)

つまらないですがどうぞ。 m ( ) ( ) m

## バカな兄弟達の絆

「わあーい」

「あつ待つてお兄さま。」x3

「こら、待ちなさい！」と、にぎやかな城の中。『呪われているなんて思えないですよね。あつ、そう言えば、皆様は産まれた子供達の名前を知りませんでしたね。一番上の男の子はロツガ、女の子はロナ

二番目に産まれた男の子はロツジ、女の子はロイ

三番目に産まれた男の子はロリア、女の子はロラ

四番目に産まれた男の子はロビン女の子はロザでございます。後にこの子達は口の一族と言われるのです。それでは続きをどうぞ。』

いつも、にぎやかで笑いの絶えなかった城でありました。が、ある日、王様とお后様がケンカをし、お后様がロツガとロナを連れて城から出て行きました。数日後、さすがに王様は心配になり、兵士達に命じて捜させました。すると、城に帰ってきたのはお后様だけで、ロツガとロナの行方は帰ってきたお后様と事情を聞いた王様しか知りません。

突然、姿をけしたロツガとロナの事を聞いたら下の子達はどんなに悲しむだろう、とお后様と王様は不安になりながらも話すことになりました。

すると、子供達は最初少し驚いたように目をパチクリさせていましたが、その後は落ち着いていました。それどころか、まるでこうなる事を予想していたかのようにでした。

次回からはロビンを中心にスタートします。

## バカな兄弟達の絆（後書き）

次回お楽しみ下さい。

実は最初からロビンを主人公として考えていました？

**最悪の呪い（前書き）**

つまらないですが読んでください。

## 最悪の呪い

あれから数年後、一番下の兄妹が12歳になり、盛大な誕生日パーティーが行われた。

「ロビンは男の子だからそろそろ、側仕えの兵士をつけよう。誰が良いだろう。」と王様が言いました。

すると、奥の間から「その必要は無い？」と、いう声と共に一人の老人が現れました。

ロザ「お祖父様？」

「フアフアそうじゃよ、ロビンのためにわし、直々に捜して、いい奴を見つけたぞ（ー）。ほら、入ってきなさい？」

「はいッス！」

その声と共に現れた少年を見て、ロビンの顔が青ざめた。

（げっ、最悪だぜ。）  
すると、少年はロビンの存在に気付くと眠そうな顔から一変して笑顔で、

「はじめまして。ハテンと申します。」と言いました。

「ん、ロビンどうしたのじゃ。ハテンが気に入らなかったのか？」  
と言う、お祖父さんに

「どうしたも、こうしたも無いだろ、ロビンが、町に出かけた時に、いきなり抱きついて押し倒した奴じゃなかったっけ。」と、口を開いたのは、ロリアだった。すると、ロリアにつられるように、ロラも口を開いて、

「そうですわ！しかもその後、謝りもせず、走って行ったそうじゃないですか」

するとそれを聞いたお祖父さんは、笑いだした。そして、笑いながら

「ハテンが？こやつは、命令されなければ、初対面の奴に向かって行きはせん！！ましてや、男などに……いや待て、ハテン

ならやりかねる。あやつは、ロビンに仕えたいと、いち早く言ったからの……大丈夫じゃる。さて、ハテン！ロビンに一生の忠誠を誓いなさい。」

「はい、この命に代えてもお守りいたします。貴方への忠誠は永遠です。ロビン様、命令があればお申し付けください。」と、ハテンがロビンの前に膝をついて言った。

ここまで礼儀正しく言われては、仕方ないと皆黙り込んだ。それを見たロビンが、ハテンの方を見て

「ついて来い！」

と、言つて広間を出て行つた。

ハテンもその後をついて行つた。

ロビンは自分の部屋に、ハテンと入り、ベットに腰掛けてからため息をつき、ハテンを見た。ドアの横に立ち、優しい笑みを浮かべ命令を待っている彼の顔を見て、やっとロビンが口を開いた。

「お前は、主人になつた俺の事をどれくらい知っている？」

「大半は知っています。私は、あなた様をお守りするのが仕事。そして、この忠誠心と同じ位あなた様を愛しております。」

「つまり、お前は最悪の呪いを知っているのか。」

「はい、同性と唇が重なると性別が変わる呪い、『バスキューバの呪い』にござますね。」

「そのとおりだ。だからお前は俺だけを見続け、守り抜け。そして？俺が寝る時に、添い寝を忘れるな。」

「？。正気ですか。」

「ああ、兄弟の中で俺だけ認められている。わかつたな。」

「はい。」

それが二人の初めての会話でした。未来、ハテンはロビンを守る四天王となるのです。



最悪の呪い（後書き）

見ていただきありがとうございます。

何か間違えがあったら教えてください。

**兄弟の秘密？（前書き）**

読んでください。つまらないですが？

ロリアの秘密しか、明かされません。

## 兄弟の秘密？

ハテンがロビンに仕えてから2日が経った。

（はあく添い寝って腕キツイ、なぜ腕枕まで要求してきたんだ。しかし、主人が気持ちよさそうだから我慢するか。）

とハテンは思つて主人であるロビンの寝顔を眺めていた。よく見てみると、ロビンの肌は女性のようにスベスベしていた。

（かわいい？って俺は何を考えてんだ。……！！）

と、ハテンは、思った。その瞬間、パチツと、ロビンが目開けた。

「何見てんだ。ふあくてか今何時なんだ？」

「あつ！はい？6時30分です。」

「そうか……ニヤリ、兄上を起こしに行くぞ。着替えをだぜ。」

「はい？……なぜですか？」と、ハテンが着替えを出しながら聞いた。すると、ロビンが笑顔で、

「お前、添い寝が面倒くさいと思っただろ。だから、俺より重症の兄上達を見せてやるよ。」

と言った。その後、ロビンが着替え終わってから部屋を出て、1つ上の兄である、ロリアの部屋に向かった。

『コンコン』と、ロビンは、ロリアの部屋のドアをノックすると、ロリアの側仕えの『無限ヒヨウゲキ』が出てきた。「おやく、ロビンじゃないか。」

あつ、でもまだロリア寝てるよ。」

と、無限ヒヨウゲキが言った。

ロビンは、いきなり子供のような、笑みを浮かべて言った。

「兄上を起こしに来たんだ。」

「なるほど、でも、ロリア怒るよ。」ロビンが部下連れて俺を起こしに来た』って。」

「大丈夫だ。ハテンはいい子だから。」

「そうか〜なら、どうぞお入り下さい。」

部屋に入ったハテンは驚いた。ベットから、離れた所にイスが3つあり、その中の2つには、誰か座っていた。

ロビン達が部屋に入って来たのを見て、イス座っていた1人がベットに近づき、ロリアの耳元で呟いた。

「ロリア様、陸蓮でございます。起きて下さい。ロビン様に来てますよ。」

すると、ベットに寝ているロリアが囁いた。

「キスしてくれたら、起きる。」

陸蓮は、それを聞くと、静かにロリアにキスをした。

その後ロリアが起き上がった。

ハテンは驚いた、起き上がった。ロリアは全裸で、先ほどの無限ヒヨウゲキに服を着せて、もらっていた。

「そう、兄上は全裸で寝ないと寝れない。そして、朝は側仕えの奴の誰に、キスしてもらっている。」

わかっただろ、俺の方がましだって。」  
と、ロビンが言った。

ハテンは、自分の心の中で、いいな〜と思っていた事を反省した。

兄弟の秘密？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

## 青色の男(前書き)

更新遅くて、すみません。つまらないですが、見て下さい。

## 青色の男

ハテンがロビンの兄、ロリアの秘密を知ってから、2か月が過ぎた。

ある人物がロビンのもとを、訪れた。

「おじゃまします。」

その声と共に、全身を黒色のマントを着た、男が現れた。

「誰だ君は、ロビン様に近付くなど、もってのほか。さがれ？」ハテン以外のロビンの周りにいた兵士たちが剣を構えた。

「兄さんの紹介で、来ました。ヒョウと言います。」  
兵士たちの行動を、あまり気にしないように、黒色のマントを着た男が言った。

「貴様！でたらめを言うな。だいたい誰が、貴様の兄なんだ。」

「俺ですよ！」

まったく、遅いんだよ！どこほつつき歩いてたんだよ。」と、出て出てきたのは。

「ロリア様の側仕えのエンヒョウです。馬鹿弟をよろしく願います。ロビン様。」

赤色の髪に少し、青色がかったような、髪で目色も赤色でちょっと目つきが悪い男。ロリアの側仕えの中でも、任務の方によく、かり出されている程の実力者。

「つまり、この黒マントがエンヒョウさんの弟だということなので  
すか？」

ロビンは、少し、機嫌が悪そうに、言った。

「ええ、っってお前は、いつまで黒マントを着てやがるんだ。そして、答える！どこほっつき歩いてたんだ？」

エンヒョウは、物凄く怒った。

すると、ヒョウは、少しだけ溜め息をすると、マントに手をかけて、  
「氷河ですよ。」

と、言っただけでマントを脱いだ。白い肌と青色の髪、そして、青色の目。青の印象が強かった。

「そしてロビン様、以後、よろしくお願いします。全身全霊で、お守りします。」

そう、ヒョウが言い終えた時に、ロビンは、こう、思った。

（肌、白過ぎたる。まっハテンと、どっちが役に立つかは、不明だが、気に入った。）

そしてロビンが、口を開いた。

「わかった、だが、ハテンは、どう思う。ヒョウの事。」

その問いに、ハテンが答えた。

「いいと思いますよ。ロビン様の仰せのままに。」

そう、言っただけで頭を下げた。

ロビンは、イスから降りて、ハテンに抱きついて、ヒョウの方を見て、笑いながら言った。

「お前に、命じる。私に、永遠の忠誠を誓え。」

「はい、このヒョウの命は、すべて、あなた様のものです。」



こうして、ヒヨウが、ロビンの側仕えの中に、加わった。  
次は、誰が、加わるのか、それは、まだ、誰も知らない。

そして、遠い遠い、山の中の城で、その様子を見ている者が、いる  
事も、誰も知らない。

青色の男（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。？

白黒の兄弟が来た！（前書き）

遅くなって、すみません。つまらないですが、どつぞ。

白黒の兄弟が来た！

ヒョウが側仕えになってから、もう、1ヶ月が経とうとしていた。

「新しい側仕えは、来ませんね。」

ハテンがそう言うと、ヒョウが少し笑って、ロビンに抱きついて言った。

「そんな簡単に、新しい奴、来る訳ないし！」

「お前は、すぐ、ロビン様に抱きつくくな？」

「いいじゃん

減るもんじゃなし）^・^（」

「〇・ー・（）＝」

その瞬間、ヒョウが、宙を舞った。

ドサッ

「うわあ、イッテ、ロビン様、ひどいぜ！」

「フツ、いい気味だぜ

（ー）」

バン！ と、ドアが、勢い良く開く音がした。

「おい！ロビン、早く広間に来い。誰か、来たらしいぞ！」  
と、ロリアが、部屋に入って、すぐに言った。

「わかりました。すぐに行きます。  
兄上は、どうぞ、先に行って下さい。」

「ああ、お前らも、早く来いよ。」

ロリアがそう言って、走って行くと、ロリアの側仕えの人たちは、頭を下げて、ロリアの後を追いかけていった。

「ふう〜。よし！俺らも行くぞ！！！」

「「はい！！！」」

広間についた時に、ロビン達が見たのは、

『ケンカ』

だった。

聞こえてきた、第一声は。

「くたばれ、『白状』兄貴！」

「何だと、お前なんて言いやがった。俺の名前の漢字は、『白状』  
じゃなくて、『白城』だ！」

「ああ、知ってるよ。くそ兄貴！」

「黙れ、『黒城』。お前とのケンカで、本来の目的、忘れそうだったよ。」

と、『白城』と言う人が、こちらを向いて、落ち着いた口調で、話  
しだした。

「どうも、お初にお目にかかります。旅芸人をしていました、白  
城と申します。そして、横にいるこいつが、黒城と言います。以後

よろしく願います。」

(丁寧に挨拶をした。白城さんの印象は、白一色だ。対して、黒城さんの印象は、黒一色だ。)

そう、ロビン達が思った瞬間、扉が開いて、やってきたのは、父親と母親だった。

「いや、会議が全然終わらなくてね。遅くてなってしまったよ。」  
そう言ってきた父親の格好は、全然、会議後の格好ではなく、研究者達が着るような、服だった。

兄弟、いや、部下達までが、驚いて叫んだ。

「どんな、格好してんだ。あんたは？」

何の会議してたんですか！」

「あつ！！大変、着替えてなかった。うん、そうだよ。城の会議じゃないよ。」

「何の会議なんだよ。」

(「!!」)

「あ、もう、面倒くさいな。なら、はいっ白城君は、ロリアに仕えて、黒城君は、ロビンに仕えてね。終了！それじゃ、バイバーイ。」

「あつ！！逃げた。」

沈黙の空気を破ったのは、白城だった。

「と、言うことなので、よろしく願います。ロリア様、美しきあなたに、永遠の忠誠を誓います。」

「俺は、男だから、美しいって言葉は嫌いだが、永遠の忠誠という言葉は嫌いじゃない。だから、ついて来い！

行くぞ！お前ら。」

「はい、永遠の忠誠の名の下に。」

そうして、ロリア達は去っていった。

他の兵士達は、ロビン達の父、ガルタを追いかけて、行った。

取り残された、ロビン達は、未だに沈黙が続いていた。すると、ハテンが口を開いた。

「おい！新入り、お前なんかには、ロビン様は、渡さないからな。」  
そして、ヒヨウが続いて口を開く。

「何々、ハテンは、俺がこの頃ロビン様にベツタリだから、新入りにロビン様が取られるかもって、心配何でしょう？」

「ちっ 違う！」

一生懸命、誤魔化そうとする、ハテンに、ロビンが、言った。

「そんなに、俺が好きなら、今日の添い寝はお前でもいいぞ、ハテン。」

「

「なっ、ロビン様までからかうんですか？」

「別に、からかって無いぞ！」

そう、ロビンが言った瞬間、黒城がやっと、口を開いた。

「ここは、そう言う所なのか？」

意外すぎて、驚きだぜ。まっ、よろしくな、えくと、ロビン様。」

何だかんだで、黒城が、仲間になった。

白黒の兄弟が来た！（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます。



## 影と謎の夢（前書き）

投稿遅くてすみません。

つまらないですがどうぞ？

## 影と謎の夢

あの日、兵士達はロビン達の父、ガルタを捕まえられなかった、らしい。

・・・！！

「・・・また、あなたに・・・たい・・・。

あなたに、会いたい！！」

・・・俺も、お前に会いたい。

「まだ、生きていたのか。今度こそ、死ぬがいい。」  
グサツ

ぐあ

（全身に走る痛みには俺は、小さく声を漏らす。

何なんだ、この痛み！

ハッ！）

ロビンは目を開け、飛び起きた。

ガバツ

「夢か・・・」

（久しぶりに見た悪夢だ。この頃、部下が出来て添い寝があったから、全く見なかった夢）



俺に、仕えたって良いこと無いぞ！」

「拙者は先ほど、主も同世代の仲間も失いました。その人達を殺したのは、拙者の兄で、生き残ったのは、妹と兄の友達一人です。影は、表の存在つまり、主が必要なのです。お願いします。」

困惑するロビン。

(何、こいつの兄貴、怖そう。しかし……。)

「わかった！部下にする。お前以外に三人変なのがいるが、今は居ない。そいつ等と、仲良くするのが条件！わかったか？」

「承知！」

と、言うたそいつはロビンの頬に手をおいてきて、ロビンの耳元で呟いた。

「ドロンでござる。以後よろしくでござる。」

そして、最後にしっかりと、ロビンの顔を見て言った。

「主であるあなたが死なない限り、拙者はあなたを裏切らないでござる。」

その言葉を聞いた後、ロビンは、寝てしまっていた。

……………。

ロビンとドロンの姿を外から、見てる者達がいた。

「あゝあ、最後の帝の四天王の座欲しかったな。」

「愛玉！ロビン様を昔の呼び方で言うの止める！」

「そんな冷たい事言うなよ。王玉。だって結局、忍玉と死玉と氷玉と解玉に取られたんだよ。」

「全く愛玉の言う通りだ。」

「おお！れいぎょく靈玉！わかってくれる。」

「うむ、しかし、ここはいったん帰ろう。ロビン様とは、個人で会うことになる。」

解散でいいだろ。さっきから、一言も喋らない、びやくふうぎょく病玉封玉！

「ああ！」

「んじゃあ！解散！」

その言葉で、外にいた者達は消えた。

## 影と謎の夢（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます！

読んでくれた方、感謝感激です？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9714p/>

---

連鎖の因縁

2011年12月29日10時56分発行